江戸期の堀川系における水の共用に関する研究*

The Shared Water of the Horikawa Waterway System in the Edo Era*

松下倫子**・藤原剛***・出村嘉史****・川崎雅史*****・樋口忠彦******
By Michiko MATSUSHITA・Takeshi FUJIWARA・Yoshifumi DEMURA・Masashi KAWASAKI・Tadahiko HIGUCHI

1．はじめに

（1）研究の目的と背景

京都盆地には，水を取り入れた庭園や社寺境内など，水辺の文化的景観が数多く生み出されてきた．京都盆地周縁部の山辺の園池については，付近の湧水や谷口からの細流といった山辺特有の水みちから水を引き込んで成立していたことを，筆者ら[1)]は既に確認している．

一方，京都盆地中央部の水辺も，敷地内の湧水もしくは近くを流れる水みち（川）の水を利用して成立していたと考えられる．ただし地形勾配が緩やかであるため水みちの全長が長くなりがちであり，また周囲が市街域であることから水需要の密度が高く，複数の水需要がひとつの水源・水みちに集中しやすい．そこで一度利用した水を他の場所でも利用するために水みちに再び戻し，限られた水資源を複数の場で共用する必要があったのではないかと考えられる．本論では，水源を同じくする水みちとその水を利用する水辺の一連のつながりを「水みちの系」と定義する（**図１**）．

そこで本研究では，江戸期の京都堀川系に属していた水辺を対象とし，先に示した仮説である「水みちの系による水の共用」を検証する．具体的には，江戸期から現代までの水利用の実態を，文献調査とヒアリング調査から把握する．

各水辺での水利用についてはこれまで，庭園史などの学問的枠組みの中で，水辺ごとに個別に論じられてきた．しかし持続可能な水辺景観の整備・保全には，水みちの系全体を視野に入れた都市レベルでの水利計画と，系に属する各水辺レベルでの水の引き込み・排水を総合的に考慮する必要があると考える．

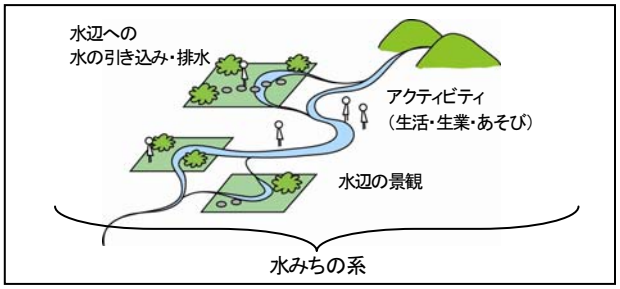


図１　水みちの系の概念図

（2）江戸期以前の堀川系の水の共用

堀川系は，平安京造営時には既に成立していた歴史ある水みちである．堀川系の流路は時代とともに変化し，部分ごとに小川，二股川，若狭川，西洞院川，大宮川，堀川，四条川，愛染川，西高瀬川，鍋取川などの名で呼ばれた．市街域では，その殆どの水みちが道に沿って直線的に流れ，都市文化や生活での利用に特化した，用水路とも呼ぶべき人工的な水みちであったといえる．

平安期の堀川付近，特に三条以北には，冷泉院や高陽院といった園池をもつ寝殿造の邸宅が集中的に営まれた．森[2)]は歴史的文献の記述から，この地域の水辺は湧水の利用で維持されていたとし，鎌倉期にかけての地下水位の低下により，これらの園池が失われたと推測している．しかし，当時の水辺で水みちの水の共用が行われていたどうかを確認するには至っていない．

中世後期の《洛中洛外図屏風歴博甲本》[3)]に描かれた細川殿には，邸内の池泉式庭園および邸外の水みちからの取水路，水みちへの排水路が確認できる．この細川殿は細川澄元・高国・晴元・氏綱の屋形と考えられているが[4)]，『賀茂別雷神社文書』には，細川高国及び信良の屋形へ上賀茂神社が支配する水みちから通水していたことを示す文書が発見されており[5)]，この園池への水みちからの通水は疑いないであろう．更に室町期の本圀寺には，隣接する堀川から引水する園池が存在したことが，発掘調査より明らかになっている[6)]．

このように，堀川系水みちの水の共用が，中世の段階で既に行われていたことがわかる．

*Key Words：景観，土木史，水みちの系
**学生員，工修，京都大学大学院工学研究科博士課程
（〒615-8540 京都市西京区京都大学桂4　TEL：075-383-3329，
E-mail：matsushita.michiko@t01.mbox.media.kyoto-u.ac.jp）
***非会員，工修，三井不動産株式会社
****正会員，工博，京都大学大学院工学研究科
（TEL：075-383-3328　E-mail：demu@art.mbox.media.kyoto-u.ac.jp）
*****正会員，工博，京都大学大学院工学研究科
（TEL：075-383-3328　E-mail：kawa@art.mbox.media.kyoto-u.ac.jp）
******正会員，工博，広島工業大学環境学部地域環境学科
（TEL:082-921-5409　E-mail：t.higuchi.wm@it-hiroshima.ac.jp）

２．現存する堀川系水辺の水利用調査

現在堀川系の水みち周辺に立地する大徳寺（芳春院），二条城（二の丸庭園），神泉苑，西本願寺（滴翠園），六孫王神社（神龍池）はどれも，江戸期から水辺が存続していることが知られている．明治初期の『社寺境内外区別取調』などの文献調査と実地調査，ヒアリング調査を行い，各水辺について，近世から現在までの水源と排水を把握した．調査結果を**図２～５**に示す．

なお，出典の記述されていない情報は，筆者が2006年10月～2007年1月に実施した，各水辺関係者へのヒアリング調査により得られた情報である．

（１）大徳寺芳春院庭園（図２）

江戸初期から中期にかけての作庭と考えられている[7]．当初は大徳寺北東部の瓢箪池（尺八池）から流れていた若狭川が大徳寺の堀に流れ込み，その水を庭園西部から引き入れて一度北部の池に貯めてから，滝石組より現在の池に注がせていた．排水もこの池を経由し堀へ返されていた．

昭和中頃より，井戸水による補助的な給水と循環水による管理を行っており，北部の池は枯池となっている．

（２）二条城二の丸庭園（図３）

寛永年間の二条城増改築時に改作され，江戸後期に荒廃し，明治末期に枯山水様式に改修されたが，大正・昭和大礼を機に再整備された[8]．当初は近接する堀川ではなく，二股川から専用の埋樋や掛樋によりはるばる導水していたが，江戸中期に途絶えがちとなり，後期には水源が途絶えた[9]．このような特殊な導水により，市街地より上流から取水することで質の良い水の安定供給を狙ったと考えられるが，導水距離が長いためメンテナンスが行き届かず，通水が途絶えてしまったのではないかと推測される．また当時の排水は，外堀へなされていたと考えられている[10]．その外堀の水は一部神泉苑へ送られ，残りは四条川へ流れていた．

その後大正大礼時など必要に応じて上水道が水源として用いられたが，1928（昭和 3）年からは内堀から水を揚水し再度内堀に排水するという循環方式で利用している[11]．内堀・外堀の水は現在井戸水及び湧水，雨水によって供給されている．現在も外堀からの排水の一部は神泉苑へ送られている．

（３）神泉苑

神泉苑は平安期に遊宴場として栄え，1602 年二条城造営時に北部を大きく削られ縮小した[12]．その際，それまで水源としていた豊富な湧水（神泉）を二条城の外堀に吸収されたため，それ以降は二条城の外堀から暗渠の管より導水するようになったと考えられている．現在も二条城の外堀の水を引いている．前節で述べたように，外堀の水は神泉および水みちから供給されていたと考えられ，二条城と神泉苑は一体的に水の共用システムに組み込まれていたといえる．

排水は四条川へ流れ，下流の農地へ通水していた．しかし四条川が昭和 40 年ごろ暗渠となったため，現在の排水は下水へ直接送られている．

（４）西本願寺滴翠園（図４）

発掘調査の結果[13]から 17 世紀初頭の作庭と考えられている．同じく発掘調査により，滄浪池の北東部において，堀川の水を引いていた可能性を示す入水口の遺構が発見されている．もし堀川の水を引き入れていたとすれば，堀川と池の水位の関係から堰を設けるなどしていた可能性もある[14]というが，この入水部は 18 世紀以降に埋没したと考えられている．加えてその近辺からは，昭和期に導水管が設けられた遺構も確認された[15]が，その水源については確認されていない．

1932（昭和7）年以降は，大井戸の水を二つの暗渠の導水管から給水している．現在滄浪池は暗渠により西池と結ばれ，更に西へ排水路が続くが，排水は自然浸透に任せているといい，西池の水が枯れている．ヒアリング当時は，堀川の水の消失・地下水位の低下が原因と見られる漏水が激しく，池底の整備が行われていた．

（５）六孫王神社神龍池（図５）

神龍池は961年の神社創建時の築造で，応仁の乱後1702年に再興され[16]，1972（昭和47）年に山陽新幹線の開通により園池が縮小した．

昭和中期まで，隣接する堀川から園池に水を引いて利用し，排水は暗渠の排水管により堀川に返していた．染料で赤や青に染まった水みちから引水していたこともあったという．排水路は一度変更されたが，ゴミ詰まりにより機能しなくなったのち，埋められたという．近代以降の堀川の環境が著しく悪かったことをうかがわせる．

昭和47年の新幹線開通以前から地下水をポンプアップして利用していたが，新幹線建設以後地下水位が下がったため，現在は地下60mまで掘り下げて利用しているという．現在は池全体に水を湛えず，石組みの一部のみに水がある状態である．排水は現在，ポンプで汲み上げた後下水へ送られている．

３．江戸期の堀川系の水の共用

前章で見られたような水利用が水みちの系の中でどのように位置づけられるのかを確認するため，当時の水みちの流路と各水辺の配置を地図上に表す（**図６**）．なお，

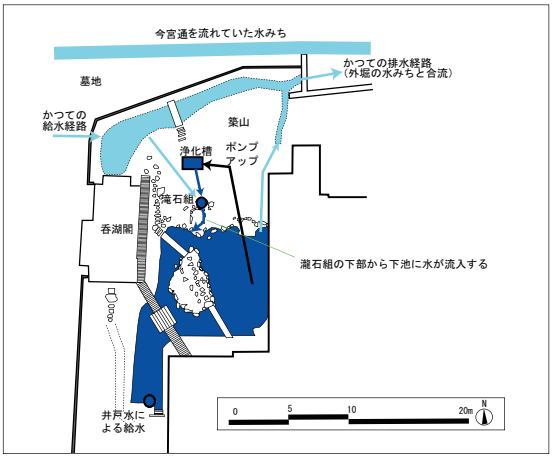
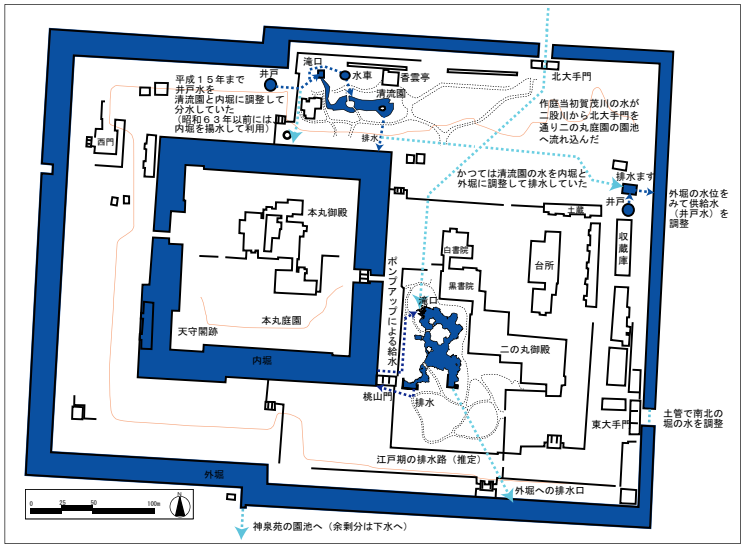


図２　大徳寺芳春院の水利用



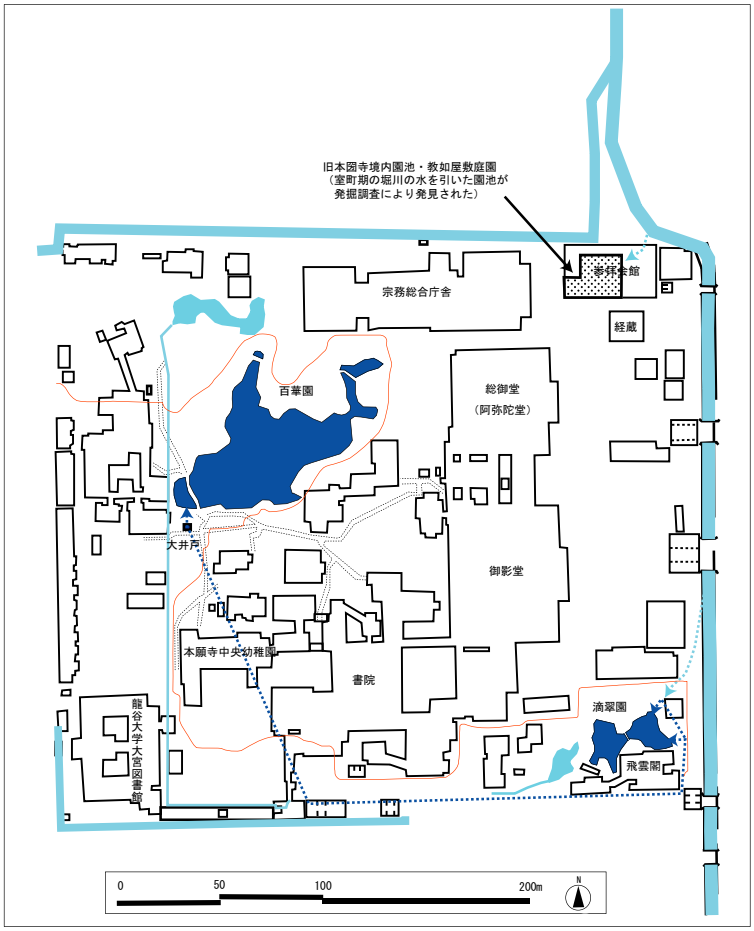


図４　西本願寺全体の水利用

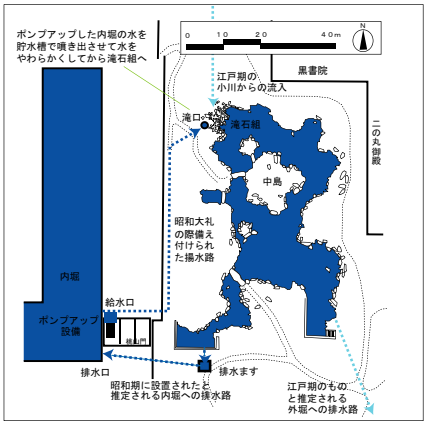


図３　二条城全体の水利用（上）と
二条城二の丸庭園の水利用（下）

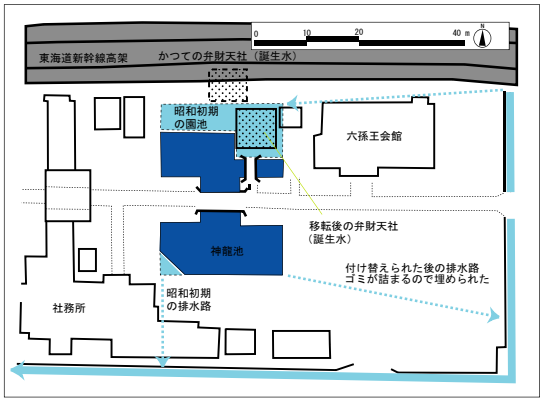


図５　六孫王神社の水利用

図２～図５　凡例

現在は失われている
水みち・池
（明治初期の『社寺境内
外区別取調』・『延喜式内
並国史見在考証』などを
元に作成）

現在の水みち・池

破線は暗渠の水路を表す

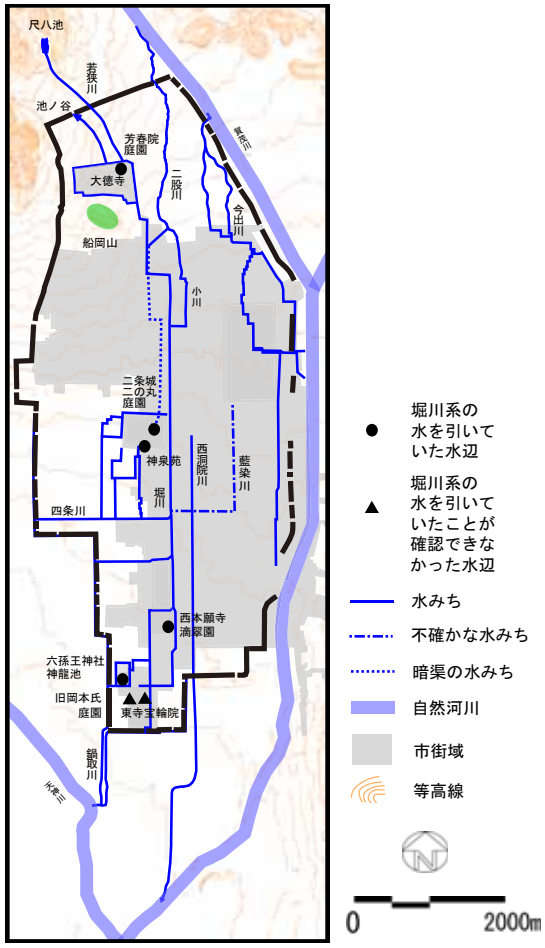


図６　江戸期の堀川系の水みちと水辺

江戸期の水みちの流路については，1701 年成立の《元禄 14 年實測大絵図》[17]より読み取り，当時の市街域については，『図集日本都市史』の「近世京都の都市周縁部」の情報を元に[18]表現する．また『都林泉名勝図会』には，堀川系水みち付近の東寺（宝輪院，岡本氏林泉）にも水辺が描かれているため，合わせて表した(*)．

この水系図からは，堀川系の水源が賀茂川の分流と尺八池からの流れであったこと，それらが市街域で合流してひとつの幹線となっていたこと，更に二条城より下流からは各方面へ水が配分されていたことが確認できる．各水辺はこの系の中に配置され，**図1**で示したような水みちの共用が為されていたことが明らかになった．

4．まとめ

以上の調査で得られた結果を以下にまとめる．

1) 江戸期に存在した水辺のうち，大徳寺（芳春院），二条城（二の丸庭園），六孫王神社（神龍池）において，かつて堀川系水みちの水を引いていたことを確認した．神泉苑は二条城外堀の水を引いていたが，その外堀には二の丸庭園からの排水が流入していたと考えられる．また西本願寺（滴翠園）についても，水みちからの引水の可能性を確認した．また，西本願寺（滴翠園）を除く全ての水辺において，かつては排水を再び水みちへ戻していた．つまり，当初掲げた水みちの水の共用モデルが成立していたことが示された．
2) 現存する堀川系の水辺は現在，その全てがポンプアップした井戸水を水源として用いている（神泉苑は二条城外堀の水を引いているが，その外堀も現在は井戸水及び湧水，雨水の供給による）ことを確認した．また排水については，大徳寺（芳春院）と二条城（二の丸庭園）において循環水として用いられ，その他の場所では下水へ流されていた．よって二条城外堀と神泉苑の間では水の共用が見られたが，その他の水辺では水の共用が行われていないことも明らかになった．

京都の歴史的な水辺景観としては，鴨川や高瀬川，白川が着目されることが多い．しかし堀川系の水みちは，現在枯れ川や暗渠になってしまっているものの，都市インフラとして数々の水辺に通水し，文化や生活に大きく貢献していたことが明らかとなった．

現在，国土交通省による「琵琶湖・淀川流域圏の再生計画」の一端として，堀川の流れを再生する計画がある．その中では，現在枯れ川となっている堀川への通水や川の親水空間化とともに，二条城の外堀への給水も検討されているという[19]．しかし本研究で明らかになったように，堀川系の水みちに支えられて存在していた水辺は，二条城だけではない．江戸期に堀川系の水を共用していた水辺の多くは現存しており，京都の水辺文化を今に伝えている．河川再生とは，河川空間整備にとどまらず，その水みちに属した水辺の再生も含むべきではないだろうか．

謝辞

本研究を進めるにあたり，大徳寺芳春院，二条城二の丸庭園，神泉苑，西本願寺滴翠園，六孫王神社神龍池の関係者の皆様にご協力を頂いた．記して謝意を表します．

補注

(*) 東寺宝輪院については『洛中絵図』[20]から，その敷地が堀川系の水みちに面していたことが読み取れるが，敷地内に水みちから水を引いていたことを確認する史料は見当たらない．『都林泉名勝図会』[21]には「当院泉水の中に涌泉あり，常に渟滀として玉の走るが如し（中略）惣じてこの辺涌泉多し」とあり，広大な園池が湧水によってまかなわれていた可能性も考えられる．東寺岡本氏林泉については，『京都民俗志』[22]に「山吹の庭」として紹介されている．その中で「庭の中に水が出るところが數ヶ所ある．井泉の形のところもあり，寫眞中央の石の下からも水が湧出してゐる．併し此の頃は一向水が出なくなり…（後略）」とあり，この園池もまた湧水を水源としていた可能性がある．

---

1) 藤原剛・出村嘉史・川崎雅史・樋口忠彦：京都の谷口地形における庭園・園池の水源と水みちに関する研究，土木学会年次学術講演会講演概要集第 4 部，vol. 59，pp. 4-172，2004
2) 森蘊：寝殿造系庭園の立地的考察，奈良国立文化財研究所，pp. 3-4，1961
3) 京都国立博物館編：洛中洛外図 都の形象―洛中洛外の世界，p. 14，1996
4) 堀口捨己：洛中洛外屏風の建築的研究，書院造りと数奇屋造りの研究，鹿島出版会，pp. 542-543，1978
5) 石川登志雄・宇野日出生・地主智彦：上賀茂のもり・やしろ・まつり，思文閣出版，pp. 126-127，2006
6) 京都市埋蔵文化財研究所編：平成 7 年度 京都市埋蔵文化財調査概要，pp. 19-21，1997
7) 重森三玲・重森完途：日本庭園史大系・江戸中末期の庭，社会思想社，pp. 54-57，1972-1975
8) 内田仁：ニ條城庭園の歴史，東京農業大学出版会，pp. 20-22，2006
9) 小学館：元離宮ニ條城，小学館，pp. 308-309，1974
10) 前掲：ニ條城庭園の歴史，p. 95
11) 前掲：ニ條城庭園の歴史，p. 70
12) 下中邦彦：京都市の地名，平凡社，p. 813，1973
13) 京都市埋蔵文化財研究所：平成１０年度 京都市埋蔵文化財調査概要，2000，p. 47
14) 前掲：平成１０年度 京都市埋蔵文化財調査概要，p. 47
15) 京都市埋蔵文化財研究所：平成９年度 京都市埋蔵文化財調査概要，1999，pp. 52-53
16) 前掲：京都市の地名，p. 1002
17) 慶長昭和京都地図集成，柏書房，1994
18) 高橋康夫他編：図集日本都市史，東京大学出版会，p. 210
19) 近畿地方整備局HPより（http://www.kkr.mlit.go.jp/plan/biwayodosaisei/）
20) 前掲：慶長昭和京都地図集成
21) 秋里籬島白幡洋三郎監修：都林泉名勝図会（上），講談社，p. 67，1999
22) 井上頼寿：京都民俗志，松田尚友堂，pp. 119-120，1933